

## 序

### データベースとしての歴史

——柳田國男の方法のメディア論的検証

大塚英志

#### 一 ソラ「実験小説論」と自然主義運動

柳田國男の民俗学の特徴は文理融合にある、と言うと多くの人々は困惑するだろうが、より正確に言えば、日本の近代に於いて「文」と「理」に一人の人間の中で分化させる必要のなかった時代に彼の学問も萌芽した。柳田はその人生で幾度か書庫に引き籠もる癖があり、辻川時代の旧家三木家、布川時代の小川家での乱読が知られるが、上京後、兄の井上通泰に託された森鷗外の書庫にも入り浸っていた節がある。そもそも兄通泰は医師であり歌人である。鷗外の中に「文」と「理」が共存していたことは説明の必要もない。そういった時代相にあつて柳田が彼の文学、あるいは後に民俗学と暫定的に名乗る彼の学問が理系的でないはずはなかった。柳田が「実験」の語を好んで用いることは近年、柄谷行人が議論の対象としたことで注目を浴びるが、それはエミール・ゾラの「実験小説論」に於ける「実験」が出自であり、彼の自然主義の「自然」は自然科学としての「自然」だった。岩本通弥は柳田が『明治大正史 世相篇』第一章（柳田一九三二）の冒頭で「実験法」「方法」「注別」「調

査」「観察」といった「自然科学の論文と見間違ふほどの用語法で、文章を埋め尽くしている」（岩本二〇二二）ことに注意を促す。それは同書の目論見が「実験の史学」の延長としてあったことをうかがわせる。自然主義と云うと私たちは近代文学に於ける「私小説」と同義とする先入観があり、そこからただちに連想される田山花袋の小説『蒲団』に柳田が不満であったことを中途半端に柳田の回想あたりから思い浮かべるとこの自然主義の問題が見えにくくなる。『明治大正史 世相篇』は一九三一年刊だが、前年に死んだ田山花袋の追悼文で柳田はこう記している。

だから文芸はまず個々の実験者が、各自の分担した部分をありのままに報告してくれる様に、改造せられる必要があったわけで、それが協力して新たな人生観を組立てるといふまでは、あるいはまだ意識せられて居なかつたかも知れぬが、兎に角に自然主義運動の、自然の論理はそこへ行かねばならなかつた。そうして今では既に予期以上の承認を受けて居ると私は思う。

（柳田一九三〇）

つまり自身と花袋を同じ「自然主義運動」の盟友として認めている。無論、柳田には幻の先住民の末裔を列島の歴史に夢見てしまうロマン主義的側面があつたが、その暴走を「ロオマンズのシインの中」（田山一九一八）に入り込んでしまうと、その都度、小説の中で諷刺揶揄したのが花袋であつた。

注意せねばならぬのは、花袋と柳田の文学は対象の「観察」という「実験法」に於いて共通だったが、しかしその対象が異なつたことだ。まだ彼らがそれぞれの「文学」を発見していなかつた一八九八年夏、伊良湖に滞在、そこに花袋が合流する。彼らは同じ風景や人々の生活を観察しつつ、それぞれ、「伊勢の海」（柳田一九〇二）、「伊良湖半島」（田山一九九九）として残すが、柳田は「海辺の習わし」、海村の人々の生活習慣の具体相を、花袋は「我が沈みなる胸」、つまり「私」の気持を優先して書き残す。このように柳田と花袋の違いは「習慣」（民俗）

と「私」というその「文学」がやがて向けることになる対象の違いであった。その意味で柳田が「自然主義」をこう揶揄していた注意がいい。

自然主義もいだらうけれども、素人写真の習い立てに友人や兄弟ばかりを写しては仕方がない。  
もう少し想像の力を養って、大に新らしい領域へ入って行かなければ不可と思う。  
(柳田一九〇九)

柳田は「写真」を自然主義の方法に比喩した上で、それをミニマムな領域に向ける「文芸」を批判し、「新しい領域」、つまりその対象を拡大せよと言う。この「新しい領域」とは一つは「習慣」であるが、それは海村の小さなそれとなく「歴史」や「習慣」によって作られる「第二の自然」である。これは花袋の『重右衛門の最期』の冒頭で掲げられた文章で使われた語である。この小説は「第二の自然」に規定された「個人の先天的解剖」をすると大仰に宣言する。「解剖」とはゾラ「実験小説論」が「実験」の例として医師の解剖を挙げているからで、『蒲団』をくさした柳田がこの小説は「同情がある」という奇妙な言い方で評価しているが、これは対象の内的な領域が正しく観察記述されているという褒めことばである。花袋が「習慣」の観察を試みたように柳田は逆に人間の内面に関心がないわけではなかった。しかし重要なのは「実験」であった。その柳田の人間に対する距離感がよく表れているとされるのが以下の一節だ。

よく旅行をすると其の先々で夫婦喧嘩をしていたり、親子喧嘩をしているのを聴く。それが自分の知り合いでもなければ親戚でもない。全く自分と没交渉の場合であると、やはり同じやうな眼、即ち草木や鳥などに對すると、「……」同じような心持で眺めていられる。そして其処にいろいろな感じや考を惹き起こすことが出来て、いろいろの興味を感ずることが出来る。  
(柳田一九〇八年)

人間を自然物に比するようには観察することで「感じや考」えを思い浮かべることができるといふ。つまりこれが「同情」である。実は柳田にとって「感じ」という極めて主観的なあり方は観察と対になる重要な用語で、対象の内的な領域への観察を意味する。

『遠野物語』の序で「感じたるままに」書いたと記したのはそれが柳田や花袋、更には国木田独歩や島崎藤村らの柳田周辺の文学グループが彼らの自然主義文学の方法を形容したフレーズであるからだ。『遠野物語』は遠野地方に於けるまさに「習慣」を記述したが同時にそこに「感じ」、つまり「同情」によって後に柳田が「心意」と呼ぶ領域こそが記述されているはずだと柳田は言いたかったわけだ。

以上、かつて拙著（大塚二〇〇七）の中で論じたことの主旨をくり返したのは、柳田の理系性の出発点を確認するだけでなく、その「観察」の対象が一つは「習慣や歴史」、もう一つはそれに規定された「内面」としてこの時点で見出されていることだ。前者は「民間伝承」、後者は「心意伝承」と名付けられるようになるのはいうまでもない。注意すべきは「観察」の方法として「写真」が挙げられていることだ。先の私小説への揶揄からわかるのは「写真」、つまり「観察」という方法自体を否定していないことである。そして重要なのはこの「写真」への比喩によって柳田の方法論が繰り返し説かれることである。

## 二 プラットフォームと投稿空間

柳田が『明治大正史 世相篇』を刊行後の一九三〇年代前半、一挙に彼の学問の体系化と組織化を試みることはよく知られる。その中でいくつもの「方法」についての講義・講演・著作が繰り返される。

『青年と学問』を改題した『郷土研究十講』（一九三二）、一九三三年には木曜会と名付けられる書齋での講義は